

天皇問題の現在

「重体報道」から葬儀までをどのよつに見るのか

中島三千男

はじめに

テーマは「天皇問題の現在——一連の儀式を見て——」という形になっておりますけれどもあまりこのテーマに相応しい話になるかどうか自信がありません。今、私は昨年の九月以降の事態を纏める作業をやっております、そのためにいろんな議論をやらしていただいています。今日も、その一環として、まだまとまっていらないんですけれども、むしろみなさん方からいろいろ教えていただきたいと思ひまして、簡単な問題提起といひますか、討論の素材を提供するということ、お引き受けさせていただいた次第です。

感覚的な表現で恐縮ですが、私もそうんですけれども、今、皆疲れているんですね。二月二十四日の「大喪の礼」が

済みまして。昨年の九月十九日以降、大変なことに放り込まれたような状況になりましたが、やっとそれが一段落したという。新聞とか雑誌関係者はとくにそうですね、今「天皇疲れ」が来ているんです。そして、この疲労感の要因はいくつかあります、一つは、確かに大変な物理的な疲れもあるんですけれども、もう一つは、やっぱり九月十九日以降の「大騒ぎ」は一体なんであったのか、これがいま一つはつきりしないという、心理的な問題があると思ひます。肉体的な疲れと、心理的な疲れ、そういう二つの側面があるように思ひます。後者の問題についてもうすこし展開しますと、たとえばこういうこともあったと思うんです。今日、私と同じ歴史をやつてる上野さんが見えておりますけれども、たとえは歴史学の中に於いてもこの天皇問題、もっと一般的に言えば、「日の丸」・「君が代」問題とか、元号や靖国問題とかいっ

た、言わば国家主義的な、これは、新しい国家主義的な言
つたりあるいは権威主義的な言つたりしますけれども、そ
ういう統合というものをどう見るか、というのとはなかなか難
しい問題なんです。これはおそらく哲学の分野でもそうでは
ないかと思えます。非常に極論すれば、言わば戦前回帰と
いう形で警鐘を乱打する人と、いやもう戦後、これだけ民主主
義が発達しているのだからそういう目論見というのは成功し
ないだろうという、極論すれば楽観的な見通しを持つ人がい
ます。極論すれば上野君というのはそういう楽観主義的な立
場に立っているのでありまして、極論すれば私は危機的な見
方に立っているというわけです。

これは論点をシビアにするために、あえて極論という形
で言っておきますけれども、そういう問題があるんですね。
だから今度のたとえば九月十九日以降の事態、これを見る場
合でもその問題というのは拘ってくるわけですね。一体この
半年余りの出来事を私たちはどう評価するのか。そして、天
皇の代替りということでいきますと、これはまだ来年の秋ま
で続くわけですから、そう言った意味でも「天皇疲れ」では済
まない、来年の秋に向けてのわれわれの戦線を立て直さなけ
ればいけないわけで、このへんでこの問題はやはりきちっと
整理しておく必要があるんじゃないかと言う感じがするわけ
ですね。逆にいいますと、学問の問題としてもこの問題、抽

象化すると、高度に発達した資本主義国あるいは、高度な
消費社会、情報化社会における天皇（皇室）の役割、機能と
いったものを考える絶好の素材を、昨年の九月十九日以降の
事態はわれわれに提供したわけで、その意味でわれわれは、
昨秋以降に日本で起きた様々な現象を、正確におさえておく
必要があると思えます。それで私は、素材としまして、一連
の儀式・行事をとりあげ、この問題を考えてみたいと思うん
です。おそらくこの問題は、たとえば哲学の關係の人が精力
的にやっております、日本文化論の問題とかそういう問題か
らも攻めていく方法があると思うんですけども、私は儀式
・行事の問題を少し考えてきましたので、この代替わり儀式
の問題を素材にしながら、この半年というのはいったいな
だったのか、どういうふうにも見られるのか、それは歴史
学の中で従来あった二つの見方とどう拘るのかということ等
を考えてみたいと思えます。

儀式の二側面

さて、そもそも国家的な儀式というのは、これは二つの性
格もつてると思うんですね。一つは国家の支配原理に拘るも
のですね。たとえば「劍璽等承継の儀」なんて言うのは、
言わば日本国家の支配原理に拘る問題として政府は位置づけ
たものだろうと思えます。そういう国家の基本原理に拘るも

のと、もう一つはその儀式を通じて国民統合を計っていくという、その二つの側面があると思うんですね。一つ一つの儀式についても絶えずその二つの側面があると思います。原理的な問題と、儀式を通じて国民統合を計っていくという二つの側面。しかし、他方で、どちらの側面が強い儀式かということもあるんですね。たとえば「剣璽等承継の儀」などは、これはどちらかというと国家の基本原理に拘る問題でありまして、国民統合的な側面というのとはそう強くないと思うんですね。ところが先日行われました、あの「大喪の礼」なんていうのはこれはまさに国民統合的な側面の非常に強い儀式だと私は思っています。

この点に関連して、来年の事に少し触れておきたいと思えます。よくこういう問題を議論している人でも新聞なんかを見ますと、「来年は大嘗祭をめぐって……」というようなことがよく言われるんですけども、しかし、国民統合的機能ということからいえば、私はむしろ大嘗祭よりも「即位の礼」の方が大変なことだと思えますよ。来年は「即位の礼」（もう一つは大饗）と大嘗祭が行われるんです。「即位の礼」というのは、今度の「大喪の礼」と同じように非常に大がかりなイベントとして行われるわけですね。東京はまた戒厳状況におかれ、外国からもまた大勢賓客が来、さらに「大喪の礼」と異って、ちょうど「フランス革命二百年」を記念してフラ

ンスで予定されている様々なショーやパレードが、大々的に行なわれることが予想されます。そういう国民統合的な側面の強い「即位の礼」と大嘗祭という国民統合には直接拘らない儀式が行われるのです。大嘗祭の日に国民がなにかをするかと言えば、殆どなにもしないで静かにすごすだけです。ただこれは国家の基本原理の問題として大事な儀式であるから重要なわけです。国民統合的な性格の強い「即位の礼」と、国家の基本原理に拘る性格の非常に強い大嘗祭という二つの性格をもった儀式が行われるわけです。いずれにしても儀式というのはこのように、二つの側面持っておりまして、あるいはどちらかの側面を強く持っているものなのです。

従って儀式の問題を取り上げる場合でも、まず第一に国民統合の問題ですね。先程の歴史学の問題で言いますと、権威主義的なあるいは国家主義的な統合というものが、果たして今日の資本主義が高度に発達し、民主主義意識がある程度定着している社会に於いて、どれだけ有効性を持つものかという、その問題を、まず考えてみたいと思います。

それから大きな二番目、レジェメでは、諸儀式の特徴と書いておきましたが、これはむしろ国家の基本原理に拘る問題ですね。今の竹下内閣といわれるものが、そういう国家の基本原理・理念に天皇の問題なり、あるいは国家神道の問題なり、あるいはもつというところ、宗教性と言われるものを、どの

程度不可欠のものとして考えているかということですね、この問題を二番目の問題として考えてみたいと思います。しかし、時間的に言いますとこの二番目の問題には入れないと思いますし、後の大久保先生の報告に拘ると思いませんので、また討論の中でも触れたいと思います。したがって報告は、いわば国家主義的なあるいは権威主義的な統合といわれるものが、具体的には昨秋以降の事態が国民の意識にどのような影響を与えたのだろうか、あるいは代替わり儀式といわれるものは国民統合に非常に大きな役割を果たすといわれるけれども、どのような役割を果たしたんだろうかというこの問題を考えてみたいと思います。但し、この場合にでも、最初に述べたように、私は未だ明確な結論をもっているわけではありませぬので、この問題を考える上で、ヒントになるであろういくつかの事実の確認ということに重点をおかさせていただきたいと思えます。

一、国民統合の諸側面

最初にまず昨年の九月十九日以降の事態ですね。私も戦後四十数年間経験したことのなかった、天皇との拘りをもったわけですけども、それを少し思い起こしてみたいと思います。

①自肅ムードの蔓延

まず最初に自肅、あるいは天皇死去以後は服喪あるいは歌舞音曲の停止と言いますか、これがどういう状況で進行したのかということをも、確認しておきたいと思えます。

まず昨年九月十九日以降に自肅ムードが蔓延するわけですね。自治体・企業・地域、こういうものの、祭りとかイベントが続々と中止あるいは延期されていくわけですね。この点についても、少し統計とってるんですけども、時間がありませんからこの自肅ムードの問題を、街の様子を素材にして印象的に述べておきます。まず、天皇の重体段階ではたとえば映画館であるとか、商店、劇場等を見ましても通常営業はほとんど影響受けなかったと思います。九月十九日、とりわけ九月の二十四日、二十五日の天皇の重体をうけて、これ以降、この自肅ムードは十月初旬にかけて、非常なピークとなったわけですけども、その時でも、通常営業は影響受けなかったわけですね。

それから「Xデー」時、一月七日から八日にかけてですね。一月八日の日、私は池袋で家族揃って食事に行つて街の様子を見ましたし、昼間は坂下門の記帳所にまで行つて、その後は竹下通りとか六本木とか歩きました。竹下通りなんてもう、普段と変わらない、中・高生ぐらいの若い男女で、非常に

う沢山の人があふれておりました。また、夕方の池袋の街は、たしかに何軒かは店を閉めたり、またほんのわずかに弔旗をかけているところもありましたが、ほとんどの店が営業をやっていました。さすがに人通りは少く、なんとなく寂しい感じはありましたが。もっとも、さすがにこの、「Xデー」時は、重体期と異なり商店などは、休業にはならなかったものの日常の営業には確実に影響を及ぼしていました。たとえば照明を暗くするとか、BGMの音を下げるとか、曲を変えるとか。私はこの日喫茶店へも行きましたけれども、有線で「君が代」が流れてるわけですね。静かな「君が代」がずーと流れておりました。そういうBGMの音とかそれから「承知のようにネオンね、大きなネオンは、ほとんど消されてしまいました。あるいはデパートなんかでは黒っぽい服装、喪章をつけたり。あるいは飾りつけや原宿や六本木あたりの、巨大な企業のイメージ広告など、そういったものが全部黒布や白布で覆われる、そういうことがありました。それから「ありがとうございます」という言葉はかけないとかですね。このように、「Xデー」時には、たしかに商店の営業は休業にはならなかったけれども、日常の営業といえますか、それは、様々なかたちでかなり影響を受けました。

次に二月二十四日の「大喪の礼」の時です。これはもうほぼ完全な商店・工場の休業です。東京の町はほぼゴーストタ

ウンと言われましたけれども、二十四時間営業の店がいろいろくらいでありまして、この日はさすがに竹下通りなんかも店は全部閉まっておりました。

このように街の様子を素材に自粛の問題を、段階を追って見ていきますと、九月十九日以降の「重体」時よりも「Xデー」時さらには、二月二十四日の「大喪の礼」の段階と、ずっとそういう自粛と言いますか、服喪と言いますかそれが徹底されていった過程があると思うんですね。私どもはむしろ九月十九日以降から、十月初旬にかけての天皇の「重体」段階の自粛の事態の印象の方が非常に強烈で、むしろ「Xデー」時であるとか、あるいは「大喪の礼」の時にはあんまりたいした事はなかったなあという印象があるんですけども、事実はそのうでないという事ですね。私共、人間の心理状態として、やはり、最初の体験というのは強烈で二度、三度になると、事実としてはより以上の事態が展開しているのに心理的には、そのようには感じられないという問題ですね。この「慣れ」あるいは「マヒ」の問題は、この自粛ムードの問題だけではなく、国民統合の問題を考える場合、大事な問題だと思います。戦前の「事変」の積み重ねから、本格的な戦争に突入していく過程の問題とも重なる問題だと思います。

②記帳ならびに「拝礼」の数

それから二番目に自肅ムードの全国的な蔓延と並んで、私どもに衝撃を与えたのはあの記帳者の波、数ですね。あの記帳者の群れ。戦後四十数年たち、戦後民主主義・「私利主義」が、それなりに定着していると思っていた中であれだけ沢山の人が記帳にいったことですね。その驚きですか、衝撃だろうと思います。これを少し数字で見たいと思います。まず、九月十九日以降の「重体」時の中で、「ご快癒」記帳と言われるものが一番多かったのは、九月二十五日です。これは日曜日ですね。さすが日曜日で、しかも前日の土曜日二十四日というのは天皇の体温も三十九度を越えるという危機的な状況ですね。多くのマスコミは死去するだろうという予測を立て、朝日新聞などもこの段階で癌報道をやっちゃったわけです。こうした中で二十四日、二十五日というのは、「重体」時の中では最高に記帳者が訪れたと言われています。たとえば皇居の坂下門ではこの二十五日、一日だけで十万人の記帳者が訪れ二十四日の五万人とあわせ、十五万人が記帳におとずれました。そして、天皇が死去するまで三ヶ月間ですけれども、宮内庁関係の施設、京都の御所を含めてですね、十二ヶ所で約百九十八万人の人が記帳に訪れたと言われています。自治体レベルの記帳所を入れますと、ほぼ

一千万と言われていますね。これ統計によって違いますけれども、八百万から九百万、全人口の約一割弱と言われておりますけれども、それだけの人が「ご快癒記帳」に訪れたということが言われております。

もちろんこれも後でみるように、中身はいろいろあるわけですが、一応数字としてはそういうことですね。

ところがこの記帳者数を見ましても「重体」時では今述べたように、九月二十五日の坂下門が約十万人で最高だったわけですけれども、いうまでもなく、天皇が死去した時、「Xデー」時ははるかにそれを上まわるわけですね。一月八日の日曜日が最高ですね。弔問記帳は一月七日から十六日までの十日間行われたわけですけれども、一月八日の坂下門で約四十万人が記帳を行ったというのが最高の数字だと言われております。私も九月二十三日と一月八日に坂下門に行ってきた。九月二十三日も確かに驚きましたけれども、この段階ではまだすごい人の列が皇居前広場をうねうねとうねっている状況ですね。ところが、一月八日はうねっている状況じゃなくて皇居前広場が完全に人によって埋まっちゃった状況なんですね。こうして、七日から十六日までの約十日間で、三ヶ月間の「重体」時の「ご快癒記帳」者数百九十八万人を上まわる二百三十三万人の人が記帳を行ったと言われております。だからこの記帳見ましても、九月十九日以降の「重体」時の

段階よりも、この死去段階、「Xデー」時の方が沢山の人々が短期間に訪れているということですね。

以上が「記帳者数」の問題です。次にこれとは少し異なりますが、「拝礼」者数の問題を取りあげてみたいと思います。まず、「殯宮一般拝礼」というのが行われています。これは近代の「大喪」の中では初めて行われたものです。戦前ではこういう殯宮で一般の国民が拝礼を行うことはなかったのですけれども、一月二十二日から二十四日の三日間、これは皇居の東宮殿ですね、いつも正月なんかには天皇一家が立って国民の祝賀を受けるところなんですけれども、ここに天皇の遺影、写真を飾りまして、「殯宮一般拝礼」というのが行われました。これ三日間で三十四万人ですね。二十二日と二十四日が十何万人で、二十三日は雨で非常に寒くて四万人ということになっております。

私は、最終日の二十四日に行ってまいりましたが、記帳の場合と異なって、年配の方が圧倒的に多いように思いましたし、また人々の表情を見ていまして、この日のポカポカ陽気も手伝って、何かピクニックにでも行くような感じ、ふだんは入れない二重橋をわたって、東宮殿前を通り、宮内庁の前を通して、坂下門から出るという、物珍らしさを顔一杯にあらわした人々の顔が印象的でした。私もはじめての経験でしたが、それにしても皇居のほんの一部にすぎないのですが、

うっそうとした大木、大きな石垣、門構え、大きな宮殿、大木の間から見える高層ビルの景観、天皇というのはすごいところに住んでいるのだなあというのが一番の印象でした。

それから二月二十四日の葬列の見送りですけれども、これは皇居から新宿御苑、新宿御苑から武蔵陵まで五十七万人もの人が見送ったというふうに言われています。ただこの数は思ったより少なかったといわれています。たとえば警察の予想でも皇居から新宿御苑まで大体百万の人が見送るだろうという予想だったんですね。それから八王子近辺で約四十万人の人が見送るだろうという予想が立てられておりました。一週間前に皇居、新宿御苑間は百万から八十万という修正がありましたけれども、いずれにしても八十万と四十万、約百二十万人の人が見送りするだろうということが言われておりましたけれども、実際は五十七万四千人といい形でも満たなかったようです。各新聞を見ても予想外に見送りは少なかつたといわれております。私も当日午前十時前、葬列通過予定時刻の間に、千駄谷駅を降りて外苑西通りの沿道に並びました。時間が時間ですのであまりよく見られないのではと予想していましたが、予想に反して人垣が何重にもという状況ではなくて、道路に直接面したところで見ることができました。

これはたとえれば雨で非常に寒かった等のことが言われておりますけれども、たとえば戦前の一九二七（昭和二）年二月

七日の大正天皇の葬儀の時は百五十万人の人が見送ったと言われています。この時は前日は雪が降りまして非常に寒い時でありましたし、しかもこの時は夜でありますから、寒いなんか言ったら到底比較にならないわけです。それから戦後の貞明皇后、大正天皇の皇后ですけれども、この葬儀が一九五一年の六月二十二日に行われておりますけれども、この時でも四十万人の人が見送っておりますね。こういうことや、東京の飛躍的な人口増を考えますと、天皇の葬儀としてはやはり少なかつたということは言えると思います。もっとも、この拝礼者の数は単純に比較できない側面がありまして、次に述べるテレビ等による間接的な「拝礼」という問題をぬきにしては語れないと思いますし、また戦前はもちろん、一九五一年の貞明皇后の葬儀も未だ高度経済成長以前の出来事でありまして、そういった意味では自粛ムードの蔓延の問題と同じように、三十四万人とか五十七万人という人が「殯宮拝礼」や葬列の拝礼におしよせたという事はやはり大きな問題だろうと思います。

③ マスコミの問題

それから三番目にマスコミの問題です。昨年の九月十九日以降の事態、それからなんとと言っても「Xデー」の二日間、それから二月二十四日の「大喪の礼」が行われた日ですね。テレ

ビ・新聞では特番あるいは特別編成という形で天皇報道行つたわけですね。

この問題をテレビの視聴率という点で見ますと、一月七日は五三・二％、八日は四九・一％というふうに言われております。これは総世帯視聴率といわれているものでありますが、意外に低かつたと言われております。というのはこの総世帯視聴率は各放送局全部合せているわけですから、大体四五％から五〇％だと言われているわけですね。そういうことから考えますと、意外に低かつたというのが新聞の感想であります。ちなみに昨秋以降の事態の中で非常に高かつたのは九月二十四日から二十五日ですね。天皇の容態の悪化と、ソウルオリンピックで鈴木大地選手が百m背泳に優勝し金メダルをとった事が重なった時ですね。九月二十四日は五七・一％と五七％台を記録しています。あるいはこの十数年来の記録を調べてみますと、非常に高かつたのは一九六八（昭和四十三）年の浅間山荘事件ですね。あの時が六二・八％だったといわれています。そういうものに比べると、確かに平均を上回っていますけれども、「Xデー」という形で大騒ぎしたわりには、意外と低かつたということですね。しかしながらこれは考え方によるのでありまして、浅間山荘事件とか、オリンピックとかのイベント的なことについてみんなが見るのと、あの面白くもない「真面目」な昭和回顧を見るのはやはり随分違う

と思うんですね。単純に低かったという形で評価できないと思うんですけども、いずれにしてもそういうふうに言われております。

ところが二月二十四日の「大喪の礼」の日はですね、六二・八〇と、これはまさに浅間山荘事件に匹敵する非常に高い視聴率を獲得したというふうに言われております。そういう状況であります。

それから四番目には、国民統合の側面という問題では、やはり東京が戒厳令的状况におかれたということですね。天皇の葬儀ということを理由に。もちろんこれもなかなか難しく、天皇の葬儀ということで表向きあれだけできるのか。実際は外国の要人が来るとか、また「過激派」云々という形でとれたという、中身の問題もあるわけですけども。ともかくもこれまでは一九八六年の東京サミットが最高だといわれてきたのですけれども、警察官三万二千人の動員という形で東京というものが戒厳令状况におかれたわけです。数日前から皇居から新宿御苑まで、ほとんど人通りがない状況がくりだされました。天皇の葬儀のためにそういう状況をつくり出せたということ、これも非常に大きい問題だと思います。

以上、昨秋九月十九日の天皇の重体報道から、「Xデー」を経て、二月二十四日の「大喪の礼」までの事態を国民統合という側面から見えました。この他にも、自治体における

日本共産党議員の天皇問題に関する発言が封殺された、またその発言が削除されたり、その発言によって懲罰動議が出された等の問題も重要な問題ですが、時間もありませんのでこのへんでとどめておきたいと思えます。

近代の歴史を見ますと、天皇の代替わりと言われるものは国民統合と言いますか、その非常に大きな絶好の機会であったということが言われているわけですけども、やはり今回も、今紹介しましたような数字をみますと、やはり大変なできごとだったということが確認できるのではないかと思います。とくにこの点で、先にも少し触れましたが、私どもの印象、感じとしては九月十九日以降の一、二週間の間の出来事に対する衝撃が強く、また次に見ますその後の自粛批判の運動の発展や自粛疲れ、シラケムードの蔓延等もありまして「Xデー」や「大喪の礼」の時の出来事を軽視する風潮もあります。一つ一つの事実を見えますと、それは一面的な見方であるということです。ちがった言い方をすれば、「Xデー」時や「大喪の礼」時の出来事を、九月十九日以降の「重体」時と比較してみるという落し穴に落ち入ってはならないということ、比較の基準となるべきは、九月十九日以前であるべきだということです。いうまでもなく、戦前にくらべれば、今回の天皇の代替わりを契機とする国民統合の機能は弱いものであります。戦後史の中で、位置づけてみますと、「一

九八八年九月一九日」以降の出来事はやはりそれは画期的な大変な出来事だったように思います。

二、相対化、批判の動き

ただ今回は戦前と違ひまして、こういった国民統合というものが一方的になされるのではなくて、それを相対化することになりますか、あるいは批判する動きもみられたということも非常に顕著な状況ではないかというふうに思います。

①自粛批判

御承知の通り九月十九日以降の問題につきまして、いわば自粛に対する批判という形で展開されたわけです。この自粛に対する批判もさまざまなバリエーションがあったように思います。自粛そのものに対する批判から過度の自粛に対する批判まで。また、自粛の国民統合的側面に対する批判から、国民統合にとつてむしろ（過度の自粛は）マイナス、危ういという立場の批判まで。

この国民統合にとって、過度の自粛は危うい、注意しなければという立場の典型は、十月八日の「国民の日常生活に支障があつてはならない。それは天皇の心にも沿わない」という皇太子の発言であり、また、十月七日の安倍幹事長発言だ

ろうと思います。とくに安倍幹事長の発言は「自粛の行き過ぎが国民生活や経済、また国民の感情に支障をきたすことがないようすべきだ」と自粛のゆきすぎが国民感情、反天皇、怨天皇感情に発展することを恐れたものです。しかしながら、私がこの自粛批判でとくに印象に残ったのは、次の点です。

一つは、有名な例の「唐津くんち」の決行ですね（十一月二～四日、「三千万人の人出」）。祭りを取り仕切った唐津曳山取締会の総取締の「陛下の……病氣報道をみて、何かおかしいんじゃないかと思った。まるで旧憲法下に戻った様な気がした。自粛ムードもいっきに広がっていったでしょう」という発言ですね。この人は元陸軍大尉で激戦地ガダルカナルで部下百八十人を失っているのですが、「彼らの死は何だったのか。このまま祭りを中止すれば、彼らに顔向けできない気がした」（「朝日新聞」十一月五日付）という発言です。

二番目は、これはいろんなところで書いておきましたけれども、青年団の、これは兵庫県だったと思うんですけども十月五日に朝日新聞に小さく載っていた動きですね。ある町でしたっけ、自粛ムードにのつて、神社の秋祭りの御輿の「渡御」を中止したわけですが、青年団がおれたちの許可を得ずに御輿の「渡御」を中止したのはけしからんという形で青年団五十名が、三千名の抗議署名を集めたという事件です。これは兵庫だけじゃなくて、「赤旗」には静岡のそ

ういう青年団の動きが載っておりませんでしたけれども、こういうのは私はかなり大事な動きだろうと思います。特に青年団とというのは、これは後で述べますけれども、戦前は青年団とかが在郷軍人会というのは、むしろこういう代替わり儀式・行事を下から町や村レベルから支える先兵だったわけですね。こういう人々が自粛はおかしいとぶつぶつ言うのはどこでもやっただと思うんですが、それにとどまらず署名運動をやる場所まで踏み込んだというのは大変大きな問題ではないかと思えます。これらの持つ意味については、後で長崎市長の天皇の戦争責任発言のところで、また触れたいと思います。

② マスコミ批判

次にマスコミに対する批判ですね。一番有名なのが例の一月七日・八日の二日間にわたるTVの特番に対して、約二万六千件の問い合わせ（うち五〇六割が苦情や不満）があったということですね。これはたとえば例の自粛の時、九月十九日以降の天皇の病気の時ではNHKだけで見ますと番組の差しかえ等に対する電話が三ヶ月間に一万二百本、これは抗議じゃなくて問い合わせもありましたが、大体五割から六割が抗議だったというわけですけれども、ともかくもその三ヶ月間に一万二百本だったわけですね。それが一月七日・八日の二日間ではNHKだけで一万八千本がきたわけですから、これはす

ごいものです。二月二十四日の場合にはかなり少なくなりまして、約三千三百件の問い合わせだったというふうに言われています。

こういうマスコミに対する批判、抗議がこれはいろんな形で、たとえば二月二十四日（「大喪の礼」の日）の特別編成を一日がかりでできなくさせたとか、あるいはNHKは本来は「Xデー」時には三日間の特別編成を考えていたけれども、二日間に短縮させたとか、確たる証拠ありませんけれども、そういう形で影響したと言われているわけですね。これに関連しましてビデオ店が繁盛し、ふだんの三倍から四倍の貸出しがあったとか、あるいは二月二十四日で言いますとスキー場が繁盛したとか、こういうことが言われております。ただこのビデオ店の繁盛とかスキー場の繁盛の問題をどう考えるかはなかなか難しい問題でありまして、たとえばスキー場の繁盛なんてこれは既に戦前にも見られたわけですよ。大正天皇の時もやはりスキー場なり温泉客が一杯だったことが言われています。新聞なんかでは自分たちの後めたさをうすめるためもあって、こういうふうには必ずしも天皇一色になってないということをかかなり大きくとり上げましたけれども、ビデオ店が繁盛したという問題をふくめ、これをどう見るかというのなかなか難しい問題だろうと思います。でも一応、相対化するといえますか、そこから脱け出す動きといえますか、そういう問題として考え

ることができらんじやないかと思ひます。

③教育現場でのたたかい

しかし、私が一番今度の国民統合という問題で、やはり戦前と違うなと感じたのは学校教育の現場ではなかったかというふうに思ひます。「一月九日のたたかい」というふうに言われておりますけれども、これはもちろん学校の先生なり、特に地域の女性たちの本当に夜を徹してのたたかひの成果なんですけれども、文部省が期待したような、黙禱して、校長先生が昭和天皇に関する哀悼の意を表して、弔旗を掲げるといふ三点セットと言われますが、これが必ずしも各学校で見られなかったという問題ですね。特に黙禱の問題ですね。特に大都市部で。神奈川なんか良い例ですが、約一割以下だったと言われております。弔旗の掲げの場合には八割以上の学校で強行されたと言われておりますけれども。校長先生の話も必ずしも文部省が期待したような形の話が行われたのはそう多くはなかったわけですね。これはやはり非常に大きな戦前と違ふ戦後の民主主義的な力量と言ひますか、その表れとして非常に大きく私は考へております。もっとも、この問題も私どもが予期していたよりは、という限点づきのものであるという点も忘れてはならないと思ひます。

天皇の死去にあたって、多くの学校で弔旗がかかげられた

事實、また大都市部以外の地域では、どうであつたのか、また大都市部でもたたかひの結果そうなつたのである、等々の問題は昨今の学習指導要領の改定に見られる動きと重ねあわせると、けつして軽視してはならないと思ひます。

④国民的な学習運動

そして四番目としてはこの民主主義的な力量にかかわる点ですが、国民的な学習運動・批判・抗議の集会がもたれたことです。確かに沢山の人が自肅に應じ、記帳に訪れ、あるいは拝礼したわけですけれども、あるいはTVの特番を見て、後で見ますようにそれなりの影響を受けたわけですけれども、しかし、他方では昨年の九月以降、二月二十四日にかけて、あるいは今日でもそうですけれども、これほど天皇問題について国民的な学習運動が行われたのは私は全くなかつたことだと思ひます。戦後すぐもこの天皇問題を議論する場というのがあつたと思ひますけれども、歴史学界では「憲法よりも飯だ」という有名な言葉ありますけれども、知識人とか先鋭的な部分では天皇問題は議論になりましたけれども、いわば国民的レベル・市民的レベルで戦後すぐ天皇問題が大きな話題になつたかと言へば、必ずしもそうではなかつたと思ひます。そういう意味では昨年の秋以降の事態というのは戦後初めて、戦後初めてというのは日本有史以来、開ビヤク以来と言つて

もいいと思います。いわば国民的レベルと言いますか、市民的レベルと言いますか、あるいは地域レベルに於いて天皇問題に対する学習活動があちこちで行われました。私もささやかながら、こういうことに拘りあいました。昨年の秋は多い時では一週間に三日位はあちこちで話す機会がありました。

非常に沢山の、労働組合だけじゃなくて、そういった意味では地域ですね、沢山の小集会が行われました。九月十九日以降の、あの一、二週間というのは、私どもはあれよあれよという感じで、なす術を知らずに十月の上旬位まで過ごしてしまつたわけですけれども、それ以降そういう私どもの学習運動・批判運動・抗議運動が、次々におこなわれました。天皇問題、飯の種、賃上げのためにもならない、そういう問題を巡って、これだけの学習運動が行われ、これだけの人々が行動に参加したというのは、全体のパーセンテージから言えばおそらく少ないんですけれども、今後の日本の歴史を考える上では大変大きな意味をもつてるといふふうに考えております。最後は国際的な批判ですね。これもやはり戦前とは違う戦後状況の表れだと思えます。海外の報道は、日本が異常な事態におかれていることを客観的に見る眼を提供しました。天皇の戦争責任の明確化はもちろん、日本の異常な事態が、日本の国際化にとっても、大きなマイナスであることを明らかにしました。しかもマスコミがそれを不十分ながらも紹介し

ていったという問題ですね。これも非常に大きな意味をもつてたんじゃないかと思えます。

三、世論調査

以上、これまで一において、昨秋以降の一連の事態は国民統合という側面においてやはり大きな意味をもっていたという問題、二において、しかし他方でそれを相対化する、批判する動きも見られたということとを述べてきました。問題はこの二つをどういふふうに考えたらいいかと、ここが難しい問題ですね。ここは是非あとで議論していただきたいと思いますが、この問題を考える上で、最後にもう一つ世論調査の問題をとり上げておきたいと思えます。

一つは二月八日の朝日新聞に世論調査の結果が載っております。一月二十五日から二十六日に調査を行ったものでした。もう一つはコミュニケーション研究会の調査であります。これは三月九日の朝日新聞に載ったものですが、若い社会学者が首都圏八大都市の学生を中心に、昨年十月下旬と一月中旬の二回にわたって実施したものです。一でみましましたような、天皇の重体時、平癒祈願段階とそれからXデー段階を経て、学生の意識というのがどういふふうに変わったのかという問題を首都圏八大都市の学生を対象として若手の社会学者が調査

して発表したものです。これは三月の新聞学会ですか、そこでより詳しく発表されるだろうということが載っております。

①天皇の戦争責任

この二つを見ますとね、非常に似てるんですね。一つはたとえば朝日新聞でも意外だと書かれておりましたけれども、天皇の戦争責任については、戦争責任があるというふうに答えている人が意外に多かったといわれているわけですね。全体として二五%ですね、四人に一人が天皇に戦争責任があるというこういう回答を行った。これが意外だ、というのは、たとえばこの調査は一方ではたとえば死去した昭和天皇に対する印象を上げて下さいというのがあるんですね。象徴天皇であるとか、戦争であるとか、いろんな選択肢があるのでですね。三年前でしたかこの時は、天皇の戦争責任については一%の人が印象として上げているだけだったんですね。ところが今回の調査ではたしか九%の人ですか、昭和天皇の印象として天皇の戦争責任を上げてるということにも連動するわけですね。このように意外と、天皇に戦争責任があると思っている人が四人に一人、二五%もいたという事、高かったということですね。これはコミュニケーション研究会の学生の調査でもやはりそうなんです。学生は五〇%が天皇に戦争責任ありと

しかも、面白いのは十月下旬段階と一月中旬段階とで変わってないんですね。一月七・八日のXデー報道が終わった後でも天皇に戦争責任があるというのが五〇%もあったと言われてます。さきほどの朝日の調査でも若い人ほど天皇に戦争責任ありと考える人が多いとありました。このように天皇の戦争責任についてはかなりの人が認めているということですね。これを一体どう見るかということですね。昨秋以降のマスコミの天皇報道の中で、一番気をつかい自主規制したのは、この天皇の戦争責任問題ですね。戦争の事実、しかもそれを侵略戦争であると認めても天皇の戦争責任については用心深くはずすというのが、マスコミの基調でした。それにもかかわらず意外と朝日の世論調査に典型的にあらわれているように、むしろXデー報道の後の方が天皇の戦争責任ありというのが多いというこのことをどう見るかという問題が一つあると思います。朝日などは、昭和天皇が生存している時には、遠慮があったというようなことを一つの要因としてあげていますが、私は次のようなこともあったのではないかと思えます。たしかにマスコミは天皇の戦争責任については慎重にさけ、むしろ平和主義者、戦争に反対していたというような宣伝を行いました。が、テレビに象徴されるように、やはり昭和天皇の「昭和史」を語るのに戦争の問題をさけて通ることは出来ず、戦争の映像が数多く映し出されましたね。この映像は年配の人にとって

は過去の時代を鮮明に思い出させるきっかけになりましたし、若い人たちにとっては全くの驚き、衝撃であったように思います。こんな戦争があったのか、という。こうした中でいくらか天皇に戦争責任がなかったか、といっても、それはあまり説得がなかった。編集・企画者の意図を越えた「映像の力」といえるかもしれません。こういうことがあったのでは、と思っっています。もちろんそういうものですから、天皇に戦争責任ありという場合に質の問題は多様なものだろうと思います。

② 天皇にたいする親近感

それからもう一つ特徴的なのは天皇に対する親近感ですね。これはやっぱり増えてるということですね。これは全体としては微増ですけども、朝日の調査もコミュニケーション研究会の調査も共通してるんですけども、二十代から三十代前半の若い層で、親しみを感じる層が急増したという問題ですね。これは共通しています。もちろんこれは全体としては低いですよ。若い人ほど天皇に親しみを感じるというのはいんですけれど、その低い段階から九月十九日以降の事態によりどう変化したかというその変化を見ますと、非常に高くなっている。朝日の場合は、前回八六年三月調査に比べれば二十代から三十代前半の若い層で親近感が急増しているのは特筆される」と述べているだけで数字をあげていません

が、たとえばコミュニケーション研究会の調査で言いますと、十月段階と一月段階の変化は、はっきり数字で出ていますね。二一%から三六%、約十五ポイントですね。十月段階では二一%の人が天皇に対して親しみを感じるということでしたけれども、一月中旬段階の調査では三六%の人が天皇に親しみを感じるということになっている。新聞は、まさにこれはもう「学習効果」が歴然だと、テレビの影響は歴然だと書いておりましたけれども。

このように一で述べたような、国民統一的側面と二で述べたような、それを批判・相対化する向きの二つをどう考えたらいいのかという問題と絡んで、世論調査においても、一方では天皇に戦争責任があるというふうに考える人が意外と高かったというのと、もう一つは天皇に親しみを感じるという層が昨年の九月以降の一連の事態の中で確実に増えてる、特に若い層では急増という表現があてはまるほど増えてるということ、この二つの問題をどう考えるのか、という問題があると思います。

おわりに

最後に今回の九月以降の事態を、以上に述べてきた事を含めて全体として、どう見るかという問題ですね。これについては何度もいっているようにまだ確信はないんですけども、

思いつくままに述べてみたいと思います。確かに一方では国民統合的な側面、今まで四十数年間経験しなかったことを私どもは経験したという側面と、先ほど言ったようにやっぱそれを相対化する、批判する動き、これもかつてない新しい芽ばえを見せてきたという側面。プラス・マイナスどっちだろうという議論もありますけれども、プラス・マイナスレベルの問題じゃなく、われわれに何を残したかという問題があると思います。私は次のようなことは最低限言えるんじゃないかと思うんですね。

①天皇の「元首化」

それは第一に、昨年の九月以降の事態の中で天皇の存在というものが、私どもが考えていたようなものではなかったということがはっきりしたということ、これがやはり一番大きいと思うんですね。比喩的に日常感覚で言いますと、天皇なんているのはたとえば園遊会があったとか叙勲があったとか、そういう新聞の社会面にも載らない、社会面の右側の第二社会面のところに載るような存在、私たちの日常生活には、ほぼ拘りのない存在、そういうものとして認識してきました。それを私どもはいわゆる象徴天皇制だと考えてきたわけですね。ところが九月以降の事態というのは、象徴天皇制というのは、実はそんなもんじゃない、場合によっては私どもの権利であ

るとかあるいは主権者意識と言いますか、こういったものを大っぴらに制限できる、あるいは私どもの日常生活に大きく拘りあいをもつ、そういう偉大なと言いますか、非常に大きな存在であったということ、天皇に親近感を感じる人も感じない人も共通に、全国同時に、事実としてつきつけられてしまったということですね。これが一番大きな問題だろうと思うんです。九月以降の事態を考えてみる場合に、天皇の存在というものが私どもが戦後四十数年間、日常感覚として考えてきたような軽いものじゃなくて、実は大変巨大な、偉大な、大きな存在であったということ、良し悪し、好き嫌いは別として作り上げられてしまったということの意義ですね、これは非常に大きな意味をもつだろうというふうに思います。

これは、別の言葉でいえば、自民党政府が戦後一環して追及してきた「天皇の元首化」の問題でもあるわけです。

その点で私は今度の代替わりの問題考える場合、天皇の問題を考える場合に、実はこの点が、つまり「あってもなくてもよい天皇」、「軽い存在の天皇」から「巨大な、偉大な、大きな存在」としての天皇への国民意識の転換、政治的には、天皇元首化の既成事実づくりの画期的な飛躍の場にするというのが政府の最大の眼目であったように思います。

つまり、どういふことかと言えば、この目的を達成するために、政府は政教分離原則の点において、一時的・部分的

に「讓歩」するのやむなしと判断したということです。たとえば例の「大喪の礼」の鳥居問題ですね。これはたしかに神道儀式、皇室の儀式としての「葬場殿の儀」と国家的儀式としての「大喪の礼」を連続して行い、全体としては神道的儀式を国家的行事で行い、政教分離原則を大きく踏みにじったという側面が基本でありますけれども、しかし、考え方によつてはですね、鳥居があつては国家的な行事としては行なえないということを実事として初めてはつきりと示しちゃつたわけですね。彼らとしては、今までそれをあいまいにしてきたわけですよ。靖国問題をとつてみてね。だからこれは確かに基本としては神道儀式を国家的行事として事実上やつたという側面があると思うんだけど、一面ではこれから国家的な行事で行う場合には鳥居というのはもう撤去しなければならぬという前例をつくつちやつたということ、これはこれで、私は大変なことをやつたと思うんですよ。全体としては、これは茶番なんですけど、個別的に考えれば、これは決して軽くない問題だと思ひます。

では、何故に政府はそういった事をやつたのかと言へば、政治的にはそれは結局、社会党を「大喪の礼」にどうして引きづりこむか、という問題があつたと思ひます。先程いつた天皇に對する国民意識の転換、天皇の元首化の既成事実づくり、いくら外国の代表を大勢参加させても、最大の野党である社

会党が参加しなければ、格好がつかないわけですね。どうやって社会党のメンツをつぶすことなく、また社会党の参加しやすい雰囲気をつくりあげてやるか、この点が政府の一番力の注いだ点であろうと思ひます。「大喪の礼」のおわつたあと、土井委員長がテレビで「今回の大喪の礼は完全な政教分離をしておこなわれた、関係者の努力に感謝している」というようなことをホツとしたような表情で語っていたのが印象的でしたが、この関係者の中には表には出ませんでしたけれども、私は舞台裏で社会党と折衝をやつた政府、自民党の関係者が含まれているものと推測しています。この問題は「大喪の礼」だけではなく、たとえば「即位後朝見の儀」において、三種の神器が出されなかつた事とも関係しています。戦前の「踐祚後朝見の儀」にはいふまでもなく、三種の神器がこの儀式の重要な道具でしたが、今回の朝見の儀にはこれはもち出されなかつたのです。このように、国民の天皇観の転換、天皇の元首化の既成事実づくり、社会党の引きよせ、このことが代替わり儀式を行うにあつたの政府の最大の目標であつて、そのためには政教分離原則、神道儀式の国家的行事の執行は、一時的、部分的には「妥協」したということです。

その点に拘つてもう少し問題を展開しますと、特にこれは社会党（もつとも社会党が全体の事態の中で、果した役割をマイナスの面からだけで見るとは間違いで、とくに社会党を下

から支えるさまざまな組織やグループ、個人が、昨秋からの一連の事態の中で果たした役割は大きなものがあつたことは言うまでもない)の問題になりますし、あるいはマスコミ全体の問題になりますけども、これらの儀式の問題をです、政教分離原則という観点ではそれなりの批判の論陣をはりましたが、国民主権の立場からの批判、戦前と戦後の憲法理念の転換、天皇・皇室の地位の変化という論点ですね、そこが弱かつたように思うんですね。だいたい土井委員長がいうように、たとえ「大喪の礼」が百歩譲って、政教分離をクリアしたものであつても、そもそもあれだけの大規模な儀式を、戦前と同じような儀式を戦後やること自体がおかしいです。ね。あるいは皇室の行事といつても、「陵所の儀」(埋葬の儀式)を戦前と同じような巨大な墓を築いて行うこと自身が大体おかしいわけでありまして、それはやっぱり政教分離の問題じゃなくて国民主権原理、戦前と戦後の憲法理念の転換の問題だと思つてですね。その問題に拘るわけですけれども、この点は政府は非常に強行だつたと思つてですね。時間がきましたけれども一つだけ話します。というのは一般には今回は葬列は行わないというのが一般の予想だつたんですね。今度は大変な警備が必要なので今の世の中ではそれはやれないだろうとね。だから多分葬場殿というのは皇居の中を作るだろうとね。皇居の北の丸のあたりに葬場殿をもうけて吹上御

所から北の丸の葬場殿あたりまでを、短い古式豊かな葬列を組んで、それをテレビ報道する。戦前のようにまさかわざわざ新宿御苑に葬場殿をつくり皇居から新宿御苑までですね、葬列を組むというようなことは多くの人が予想しなかつたんですね。それはできないと、警備上不可能だということとを予想したわけですよ。この警備上というのは、狭い意味のそれではなく、莫大な予算を使い、また様々な形で私権を制限する、日常生活を制限するようなことは、戦前と違つてさすがに今回はやれないだろうということですよ。ところが政府はやつたわけですね。三万二千人の最大の警備を敷いてもやつたわけですね。やはりそこに意味があると思つてですね。天皇の威厳を示すといいますが偉大さを示すためには、三万二千人という最大の警備を敷いても、少々荒っぽいことをやつてもやるんだと、そのことはやるんだ、国家的儀式としてね。そういう政府といいますが国家の決意を見せつけられたような気がするのです。これが第一点です。

② 相対立する二つの潮流のせめぎあい

第二点は天皇問題をめぐって、国民の中に分化、二極化の兆しが芽生えてきた、あるいは相対立する二つの潮流が形成されてきた、という問題です。

一つは、天皇に指向するベクトルのものです。たとえば数

百万、あるいは一千万人という記帳者の数です。この中身をみましても、古い言葉に「老若男女」という言葉がありますように、それは世代の違い、性別の違いを越えておりました。しかし、大雑把に分けて見ますと一つは年配の層、なんらかの意味で戦前の社会、あるいは戦争の体験を持つる世代と、もう一つはいわゆる、団塊の世代から、今の若者の世代まで。後者も細かくは、団塊の世代と若者というふうに分けることが出来ますが、前者との比較では大きく一つに括ってもよいと思います。

そして、前者の世代が、今回の事態にあって、天皇に指向するベクトルの方に反応した心意は、大きくいつて二つぐらいあったように思います。一つは、戦前の教育の残滓の問題、天皇を主権者、神として体の中にたたきこまれた問題。そして、もう一つは鈴木正幸氏の言う、共通苦勞体験といわれるもの、これは、戦争観の問題としては、侵略戦争という認識の欠如、被害者としての戦争観をベースに、天皇を自らの歩みに重ね、苦しい戦争―敗戦の混乱―豊かな社会というシェーマに位置づけるものです。この二つが核になって、日本が今日の平和で豊かな国になったのも、天皇が居てこそ、という感情だろうとおもいます。

それから、後者の世代、団塊の世代から若者までを含む層の問題ですが、これはかなり多様なものを含んでいるように

思います。よくいわれているように、これらの層の反応は、「物珍しさ」、「記念になる」、「話題になる」、「永遠に残る（自分の名前が）」といった、いずれも、個人（自分）の利害（関心）に基づくものであり、その意味では芸能人・スターに対するものと同じだという意見があります。たしかに、そういうことは言えると思いますが、問題は現実には芸能人ではない天皇が、また、これまで、特に若者層には関心の薄かった天皇が、それと同じ意味、価値をもつと認識されたことだろうと思います。このことは大きいと思います。天皇が居ても居なくてもどうでもよいものであれば、そういう現象はおこらないわけで、こうした現象がうまれた背景には、マスコミの特別な取り上げ方によって、天皇というのは、今までの自分達の認識とは違う、大変な存在、あるいは「価値」をもっている存在であるという認識が若い人にひろまった結果であると思います。

また、いうまでもなく、これらの層の天皇観の問題があると思います。これらの層は軍服姿の天皇イメージは持つていず、生物学者としての、あるいは公務を一生懸命つとめている、けなげな、人の良いお年寄りのイメージであります。あるいは、団塊の世代の上の方は、現天皇（明仁）の結婚、ミッチー・ブーム、軽井沢の恋を通しての天皇・皇室感があります。因みにいまの若い人が、テレビの画像のなかで、最も関心を

示したのは、この点と、現天皇夫婦が子供を自分達の手で育てたという点であります。昭和天皇はこういう、家庭（ホーム）のお祖父さんというイメージです。そして、このイメージの根底には、団塊の世代にはマイ・ホーム主義といわれるもの、若い層には一人っ子に代表される、もっとベタベタした親子関係、家庭像があるように思います。また、身の回り主義といえますか、公と私の区別の稀薄化、感覚化といえますか、天皇の重体から死去といった過程を自分の肉親、あるいはお祖父さんのそれと、ストレートに直結させる思考様式の問題でもあるように思います。

また、国家にはやはり、それを代表する、象徴する人がいるのではないか、という素朴な国家観もあります。とくに外との関係において。そして、そのためには、特別な人がいるも良いではないかという意識、これは特に若い人に見られる平等意識の稀薄化、主権者意識の稀薄化、あるいは団塊の世代を含めての、昨今の上流指向の風潮、階層化・「差異化」の是認の風潮、さらには「聖なるもの」、「不可思議」なもの、「儀式」、「儀礼」、「祭り」に対する関心の増大「レトロ・ブーム」とよばれるもの、広い意味では「ポスト・モダン」の思想状況とも重なっているように思います。

以上、天皇を指向するベクトルを年配の層と団塊の世代から若者の世代までの二つにわけて、その中身を見てきました

が、今後の天皇制、象徴天皇制の問題を考える上では、先程の世論調査における若者層に顕著に見られた「親近感」の増大と関連して、後者の方が、つまりもっと一般化すれば、高度経済成長、消費社会の発展、「私利主義」の定着の中で、芽生えてきた、天皇への「親近感」、皇室との接点が大きな意味を持つてくることはいうまでもありません。もっとも、未だ、この層の天皇への共感はいデオロギー化されておらず、その意味では流動的なものであると言っても良いでしょう。

さて、もう一つの、今度は天皇から遠ざかっていくベクトルの問題です。まず、長崎市長、本島市長の「天皇に戦争責任はあると思う」（十二月七日定例市議会）という発言の問題から入っていきたいと思います。この天皇の戦争責任問題は、マスコミがもっとも自主規制した、いわば「口が裂けても言わない」問題でありましたし、また数少なくない地方議会でも、共産党議員の同種の発言に対し、自民党を初めとする保守系議員が、発言の削除を要求したり、問責決議を出したという中で、行われたのですから、その衝撃は大きいものでした。

この問題を、思想史的に見ますと一つはこういうことだろうと思います。つまり、私は日本の保守思想あるいは現実主義といわれるもののアキレスは天皇問題だったと思っております。これは戦前はおろか、戦後今日でも言えることだとおも

います。天皇問題の「正論」、「押し出し」に非常に弱いという事です。戦後の、歴代の首相を見ましても、この人はリベラルだとか、この人はウルトラではないと言われ、期待されながら、「正論」には持ちこたえられない、それでおされると、結局妥協してしまふ、あいまいにしてしまうという問題は、何度も経験してきました。たとえば靖国神社問題をとつても、八月十五日に靖国神社に参拝し、今日の公式参拝の発端をつくつたのが、三木首相だったという事です。こうしてみますと、自民党員でもあった、本島市長が当時にあつて最も核心に触れる「天皇にも戦争責任がある」と発言したことは大変大きな意味をもつておられると思います。いやもっと正確に言えば、そういう発言をしたということではなく（そういうことを口にするのは、これまでに見られなくはなかった）、発言をしたあと、猛烈な「正論」による攻撃を受けながら、今日にいたるまで、撤回せずに頑張っているという事、ここが大事な問題だろうと思ひます。保守思想の中から、初めて天皇問題を相対化する思想、天皇の問題を客観的に論ずる「強い」思想が出てきたという問題です。

もっとも、この問題を別の問題から光を当てれば、本島発言も、その思想上において、特異なものではないともいえるかもしれませんが。すなわち、近代日本において、天皇問題を相対化できたのは、マルクス主義であるとか、キリスト教

といったような、外来の思想によってのみであつたという問題です。そして、今回の事態の中でも、この点は妥当だと思います。共産党「赤旗」の活動は期待されたものであつたと思ひますし、また一部ではありましたが、クリスチャンの果した役割も非常に大きかつたと思ひます。大学において一番きちんとした対応をしたのが明治学院大学であつたということも、その一つでしょう。こうしてみれば、本島氏はクリスチャンであり、しかも祖父は明治初年に新政府によって厳しい弾圧を受けた、浦上キリシタンの一人であつたということを考えれば、この発言もうなづけるものかもしれません。

しかしながら、私が重視したいのは、本島市長も言っているように、この発言の背景には、そうした宗教的背景だけではなく、また原爆が落とされた長崎市の市長というだけではない、自らの戦争体験の問題があつたというのです。そして、この戦争体験という問題では、あの自肅ブームの中で、祭りを決行した佐世保のおくんちの総取締役の発言、「ここで祭りを中止すれば、戦争でなくなつた多くの戦友に申しわけがたない」というのもあります。つまり、戦争体験を媒介にした、天皇の相対化の思想のあらわれの問題です。

このように、これまでマルクス主義やキリスト教といった外来思想によってのみ、天皇の相対化が可能であつたといわれる日本思想史のなかで、自らの、国民一人一人の戦争体験

を媒介として、天皇を相対化する思想の芽生え、その広がりが見られたこと、この点が、私は大変重要なことと思います。あるいは、この戦争体験というものをもっと拡大すれば、それを前提として成立した、戦後民主主義の問題にまで拡大するでしょう。先程の青年団の動きや九月以降の事態の中で、たくさんさんの学習会、抗議・批判の集会が持たれたといいますが、そこに集った多くの人は、まさにこの戦後民主主義を媒介としたものであったでしょう。このように、マルクス主義やキリスト教といったものばかりではなく、戦争体験や戦後民主主義といったものを媒介にした、天皇を相対化しまた批判する国民、思想が一定の広がりをもって形成されたことの意味は大きいと思います。

このように、昨年九月以降の事態は、これまで未分化であった国民の天皇観に波紋を投げかけ、一方で、経済的發展、消費社会の發展、「私利主義」の定着の中から芽生えてきた、「天皇への親近感」や「天皇との接点」、他方で、戦争体験や戦後民主主義と媒介にした天皇（制）を批判する、あるいは相対化する潮流の芽生えという、その分化の兆しをつくった、という事があると思います。もっとも、例えば記帳の列に並んだ若者が、他方で、テレビの異常報道に対して抗議の電話をするといった具合に、この「私利主義」と戦後民主主義は重なる部分をもっているわけです。そういった意味では、

「戦後民主主義の乗り越え」、「新しい民主主義の發展」といった議論もなりたつわけです。しかしながら、「戦後民主主義」といわれるものは、あいまながらも、それなりの「社会観」、「国家観」をもっているわけで、したがって問題は、「私利主義」というものが、今後どのような社会観や国家観をもち得るのか、という問題であろうと思います。「日の丸」「君が代」や学習指導要領の改訂に見られる天皇、国家観（「君が代」の君とは「あなた」ではなくて「天皇」であるという転換が象徴的である）が、「私利主義」とどのような接点をつくりあげることができるのか、逆に、戦後民主主義といわれるものが、高度経済成長以後の社会の変化の中で、どのような国家観、社会観、もっとひろくいえば、連帯の思想や文化をつくりあげていくことが出来るのか、このせめぎ合いが、今日、し烈になされている状況だと思えます。

③唯一の基本争点ではない

第三番目に、天皇問題が唯一の国家の基本争点にはもうならない時代になったということも今回一つ明らかになったのではないかという気がします。たとえば九月以降の共産党の議席あるいは得票率のことをずっと注目してらるんですけども、昔だったら共産党はまさにこれで孤立させられた側面があるんですよ。三・一五事件というのは一九二八年なんです

けれども、いわば御大典を成功させるためにいわばこういう目度いことをひっくりかえそうとする不逞の輩ということ、国民から共産党というのは徹底的に孤立させられていくわけなんです。だから戦前というのはこの問題というのはやっぱり一つの政党の伸長の基本問題にかかわっているわけですよ。ところが九月十九日以降の事態で見ますと、地方議會での共産党議員の天皇発言に対する、削除要求や問責決議等が少なからず見られたのですが、しかし、その事によって、たとえば選挙において得票がガタヘリするかといえ、そうはならなかった。むしろ、消費税の問題とか、リクルートの問題とかがあつて、得票が大きく伸びる、というようなことがあつたわけですよ。たしかに天皇問題も昨今の元首化、日の丸、君が代問題や学習指導要領の改訂の問題にもみられるように、国家の基本問題の一つには違いないんだけどもそこだけが基本的な論点になり、勝負になるという時代とはもう違う時代になってきたということも、昨年の十九日以降の事態は明らかにしたんではないかということも考えております。そして、そのことは実は、今日の天皇問題のあり方の基本が国民意識のレベルではイデオロギー的なものというより、「私利主義」をベースにしたものである、ということと密接にかかわっているのだと思います。

④大企業・業者団体による支配

戦前との違いということで言いますと、私は一九二六年から二八年の大正天皇から昭和天皇への代替わりの状況について調べたことがありますけれども、先ほど言いましたように、戦前ではたとえば代替わりの儀式・国民動員・国民統合ということ、それを下から支えたのは、これは上野君が中間団体ということである論文に書いておりましたけれども、たとえば戦前でありますと、先ほど言いましたように青年団であるとか、在郷軍人会であるとか、あるいは町内会はまだ確立しておりませんけれども、その前身の衛生組合等の組織であるとか、そういう町や村、地域に網の目のように張りめぐらされたところの半官半民の組織と言いますか、行政補助組織と言いますか、それが支えるわけですね。これはおそらく戦争だつてそうだと思います。町や村で戦争支えたのはまさにそういう団体・組織、人々が支えるわけですね。今回はどうであるかと言うと、どうもそれはないわけですね。先ほど言ったように、むしろ、青年団というのは例は少ないですけど、逆の動きもするわけですね。もちろん在郷軍人会というのはありません。町内会というのも私の見た範囲ではそんなに大きな役割を果さなかつたように思います。あるいは戦前の草の根の中間団体に匹敵するものとして私は、例の、草の根の保守主義

です。右翼的な宗教団体や自衛隊関係の組織等を中核とした「日本を守る会」や「日本を守る国民会議」、そういうものを予想していたんですけれども、それも今のところは団体・組織としての目立った動きはなかったですね。もっとも自肅や記帳や拝礼等といった問題に、これらの組織に属している人々のかかわりは、相当な部分を占めているであろうことは十分予想されますが。また戦前では中間団体と共に、国民統合を下から支えたのは学校です。しかし、これも先ほど言ったように今回ではそうはならなかった。

こういうふうに見ますと、今回は九月十九日以降の自肅のムードからもそうなんですけれども、あるいは一月七日・八日それから二十四日の自肅・服喪状況を下から支える上で際立って政府の意図をきちっと支えたのは私は大企業だったと思います。これも個々の企業だけでなくたとえば銀行協会であるとか電気機械工業会（東芝など百数十社加盟）等のそういった社団といえますか、コーポラティブといえますか、そういうところで、政府が直接命令するんじゃないやなくて、大体こういう自肅をやるうとか、休業しようとかそういう方向が決まる。また大企業だけではなく、中小あるいは自営業においても、たとえば理美容団体が決めるとか、そういうことだったと思います。これは自治体の場合もそうであって、まつりやイベントはだいたい実行委員会のようなものによって運

営されていますが、ここに結集している団体がだいたいそういう団体なのです。この点が、戦前の段階とは非常に大きく違って違う特色だろうというふうに思います。

今日における危機管理体制の問題、あるいは、渡辺治氏のいう今日の保守支配の構造の問題ですね。今日の天皇問題を考える場合でも、この問題、さらには労働組合運動の問題、新「連合」の問題とも関連しますが、この問題というのは非常に大事な問題ではないかと思えます。

この他にも、マスコミの問題や、いわゆる「右翼」の問題等、論じなければならぬ問題があるわけですが、紙数の問題もありますので、マスコミの問題については、天皇問題の弱さ、タブーの問題だけではなく、この他のことについても見られる、一点集中主義的な報道姿勢の問題があること、また、「右翼」の問題については、事実だけではなく、自肅ムードの中でみられたように、自らその幻影を作りだしてしまふ、客観的には容認してしまう国民の意識の問題もあることを指摘して終わりたいと思います。

付記

本稿は三月十八日の関西唯研主催のシンポジウム「いま天皇問題を考える」での報告に手を入れたものである。とくに「おわりに」の部分には大幅に加筆した。

（なかじまみちお・神奈川県・日本近代史思想）